ロックン・ガール、斬られて候。

鮎川美糸

ayukawabeat

東日本大震災の復興支援のため、十六年ぶりに「プリンセス　プリンセス」が２０１２年に期間限定で再結成された。
８０年代にデビューした女性５人組のロックバンドでガールズバンドの先駆けでもあった。彼女たちに憧れて楽器を手にしたり、歌い始めた少女たちは大勢いただろう。再結成を熱い気持ちで応援していた私もその一人だった。

だいたい中学生くらいの頃からいろんな音楽に興味を持ち始めるが、私たちの世代はラジカセやレコードなどで音楽を聴いていた。お小遣いの少ない私はもっぱらラジオだったが。
ある日、ＦＭで中村あゆみの曲を聴き、熱く感じるものがあった。私の好きなのはこれだ！と強く思った。決して上手くはなかったがパワフルでソウルフルな歌に心を奪われたのだ。
それからロックは私の相棒となる。

聴くのは好きでも音楽をやることはないだろうと思っていたが、バンドブームがやって来て、私もその波に乗っかってしまった。
それはプリンセス・プリンセスの渡辺敦子に憧れてベースをやっているという女の子と友達になったのがきっかけだ。彼女の噂を聞きつけてギター、キーボードができる子たちが一緒にバンドをやろうと声をかけてきて、私も誘われるまま足を踏み入れた。私のパートはコーラスとサイドギターになった。ギターは初心者だが、興味があり友達が指導してくれるとのことなので二つ返事で決めたのだ。この時の興奮は今でも覚えている。
私は張り切って知人にエレキギターやアンプを安く譲ってもらい、教則本を見ながら自主練習を始めた。しかし、なかなか難しいものでコードを２、３しか出来ない。不器用で押さえることが出来ないのである。とりあえずチューニングをするも、弦を締めすぎていきなり切ってしまう。しかも切れた時に弦がはじけて手に直撃し、かなり痛かった。ロックンローラーへの道は険しいのう、と赤く腫れた手をさすりながら楽器屋へ弦を買いに走った。

翌日、チューニングが出来たので嬉しくなってアンプに繋いで、ジャカジャカやっていると外で近所のお年寄りが大声で、
「なんや、空襲警報のサイレンかいな？」
「そんなわけないやろう」
「テレビの音か」
「なんかの雑音やろ。びっくりするわ。心臓に悪いなあ～」
などとやり取りしているのが聞こえた。お年なので聴覚が少々不自由なのだ。しかし空襲警報で刺激を与えてあの世へ逝かれても困るのでヴォリュームをしぼって弾いていくことにした。すると弟に、気味が悪い音は止めてほしいと注意された。
数日後はアンプに繋がず弾いていた。アコーステックギターみたいなものだろうと思っていたがペケペケとお間抜けな音が響くばかりである。しかしめげずに続行していると、母が覗きに来た。三味線を弾いているのかと思い、気になったとのことである。なんでやねん！

脱力し、トホホな心境になったがバンドはチームワークなので皆には迷惑をかけられまいと頑張った。
成果の出ない自主練習に挫けかけた頃、友達たちはデートやバイト、勉強で忙しくなってきていた。このままでは自然消滅してしまうと焦り、緊急招集をかけて話し合いの場を持つ。が、座礁。
だけど気持ちに火がついていた私は、ライブハウスで知り合った友達に頼んで紹介してもらい、ほかのバンドのコーラスをさせてもらえることになった。
だがそのバンドもいまいちだった。私が入るなりヴォーカルとドラムが音楽性の違いで（仲間割れとも言う）脱退。
急遽、私がヴォーカルに昇格（？）し、おまけにドラムの代用品のリズムボックスの操作の担当も押し付けられた。時にはタンバリンもと言われる。コントさながらにあたふたしつつも言われるままに頑張り、スタジオでの練習を繰り返すも、リーダーの就職活動が始まり活動は休止。
まあ、事実上は解散だ。
そこへ渡りに船。良かったら一度スタジオに来て歌ってほしいと声をかけてくれたバンドがあった。
「それってスカウトやん。凄〜い」
と友達は言ってくれた。お世辞半分だろうが満更でもなく、大したことはないと平静を装いつつも乗り気で連絡をした。
彼らは素人の私が聴いても上手いなと思えるバンドで、なんでまた私に？とも思っていた。
だが、おいしい話なんてそうそうないということを思い知らされる。
女性ヴォーカルを何人かキープして、曲によってメインで歌わせて、他の時はコーラスという方針であるとリーダーから説明され、軽いショックを受けた。このバンドをやっていくうちに大体メインで歌う子が決まってくるだろう。厳しい弱肉強食の世界が繰り広げられてゆくのだ。楽しくやりたいという思いとかけ離れたが、歌いたいという気持ちがあったので参加を決めた。
しかしコーラスはバックで歌っていればいいだけではなく、少々ダンスっぽいことも、ノリの良さも要求された。なんか違うんだよなあと思い始めた。なんだか内山田洋とクールファイブを連想してしまうのだ。私はバックで「Ｗｏｏ」とか「イェイイェイ」とかハモり、ロックをしているはずなのだが、「ワワワワ〜」と素敵なスマイルで歌うクールファイブ感を否めずにいた。
そんなある日、もっと笑顔で愛想よく歌うよう指示があり、ああやっぱり「ワワワワ〜」やないか、と絶望感を抱いた。しかし立ち直りは早く、数日後にとある音楽プロダクションが女性ヴォーカル募集のオーディションをすることを知り、速攻で書類とデモテープを送る。そして一月後に一次選考を通過したお知らせが届き、ラストチャンスにかけて受けに行ったのだった。
聞いたこともないような会社だったが、バンドブームの真っただ中だったため会場には私のような思いを抱えた女の子が大勢来ていた。約１７０人ほどが書類選考、面接、歌の審査で数回に分けてふるいにかけられ、残ったのは４人。そこへ奇跡的に私も入っており、研修生として所属

することが決まる。毎週スタジオに集められ、先輩たちとヴォイストレーニングや練習をすることになった。選ばれし精鋭たちは皆、歌はもちろん上手い。その上きれいで垢抜けている。だから容姿とセンスに自信のない私はものすごく気おくれしていた。
　そんな時、プロデューサーと話をする機会があったので私が合格させてもらえた理由をそれとなく聞き出した。やる気がある、これまでの経緯に同情した、この二点であった。

やる気は満々であるが空回りし続けてきたのを気の毒に思って下さっただけなのだが、私は何を勘違いしたのか容姿ではなく実力で選ばれたのだと解釈した。放送部に所属していたこともあるので発声の基礎が出来ており、少し前から友達に教わってヴォイストレーニングをしてきたのも良かったのだと勝手に納得していたのだ。馬鹿も休み休みにしろ、とその時の私に伝えたい。私はそれ以降、堂々とレッスンを受け、積極的に質問したり、指導を受けたりしていた。若さゆえ（馬鹿さゆえ？）の暴走である。
　しかしそんな暴走族も一年弱で終結を迎えた。あるホールを借りてプロダクションのライブを行うことが決まったことがきっかけであった。ホールを借りるためのチケットノルマや衣装代などで十万ほどかかるというのである。当時の私にとってはとんでもないほどの大金である。しかも集金は翌月。親が厳しくてあまりバイトも出来ず、まだ学生でまとまったお金は持っていなかったため、泣く泣く諦めた。
　所属していてもお金がないとライブに出られない。しかも部外者は来ない単なる身内だけの発表会だ。それが事務所のメイン行事で、当然ながら世に出た人は一人もいない。テレビはもちろん、イベントなどの出演依頼の話すら聞いたこともなかった。売れたいという野望はなくとも、せめて小さなライブハウスでいいから一度くらいはやってみたかった。そんな事務所の方針に疑問を感じ、辞めることに決めた。しかしマネージャーに引き留められ、プロデューサーが東京へ行かないかと言っているという旨の連絡が入る。一縷の望みを持って話を聞きに行ったが、東京の事務所も同様の形態で活動しているだけで、東京にいるからチャンスがあるわけではないとのこと。でも路上ライブはたまにやるし、それで良ければとのことだった。意味ないじゃん！！と思ったが、ご厚情に感謝しつつ丁重に辞退させていただいた。

　あれから二十年ほど経ったけれど、あの時の気持ちはそのままだ。引き出しの奥にしまってある小さなダイヤの付いたピアスみたいに、ずっと輝き続けている。
　いつしか私は歌いたい気持ちに蓋をして普通の大人になりきろうと突っ走った。あれからもバンドをするチャンスはあったのだが仕事や社会性を優先してしまったのである。だけど、消したつもりでいた火は煌々と燃え続けていた。
あの時刻み込まれたリズムとロックなハートはずっと私の中に残されていたからだ。
　たとい現実問題とお間抜けさにバッサリ斬られてしまっていても、永遠に。

　ロックをしているか、していないか。

即ちそれは、好きか嫌いか、心地よいかそうでないか、ノレるかノレないか、感じられるか感じられないか、その空気を吸いたいか吸いたくないか、体の中にあるのかないのか、響くのか響かないのか、受け入れられるか受け入れられないのか、揺さぶられるか揺さぶられないか、歌いたいか歌いたくないのか、ということだけのことだと考えている。だから私はただの一般人でありながら、現役バリバリのロックンローラーのような気がしてならない。

今も私を動かし続けるのは、あの時の気持ち。きっとあの頃のガールフレンズも。

時計を逆回転させることは出来ないけれど思い出すだけで、あの時間が押し寄せる。何も形にできなかったけれど、同じことが大好きで同じ夢を見ることができた。失笑されても、あの日々はダイアモンド。

それからこっそり見守ってくれていたドラマーのボーイフレンド。君の見ていた夢をより近い場所で見たい、感じたいという気持ちもあったから、歌い続けたかったのかもね。

その時の想いも、君も、今はもう空の青の上。

今はみんなそれぞれのビートで走っているけれど、ロックな気持ちは忘れるなよ。

キープ・オン・ザ・ロッキン！！

それが私のプライドで、帰る場所だから。

ロックン・ガール、斬られて候。

http://p.booklog.jp/book/72558

著者 : ayukawabeat（鮎川美糸）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ayukawabeat/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72558

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72558

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ